

1 派遣期日 平成 29 年 6 月 17 日(土)

2 研修先 学校名(会場名) 千葉大学教育学部附属中学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-3-3
<http://www.jr.chiba-u.jp/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

研究テーマ：自ら問い続ける生徒の育成
～新しい時代を生き抜くための「実践知」を培う授業のあり方～

① 実践知とは

アリストテレスが分類した三つの知識の一つ、フロネシスという概念に行き着く。野中氏(一橋大学名誉教授)によれば「実践知は、論理的に健全な判断を可能にする経験的知識である。それは、日本語の『徳』-共通善や道徳的卓越性を究める生き方-に似ている。」としている。千葉大学附属中学校では、めまぐるしく変わる社会の状況に、しなやかに対応し、最適解を導き出せる知、つまり使いこなせる知をいかに身に付けさせるかが肝要であると考え、あらゆる教科において、実践知の発想で授業を行っている。

② 「現実に使える知」を身に付ける授業に持たせたい「七つの特性」

切実性 自分の問題であり、我が事だと捉えさせるために、授業では教師が切実性のある問いかけや場作り、課題設定をする。必要感を抱かせてこそ、生徒は自分なりの答えを導く。

真正性 本物を見せる、解決過程が初見では見通せない課題の提示などが、生徒のより深い思考、理解へと結びつく。

汎用性 以前学習したことを元にして問いについて考える、問題解決に向けて今知っていることで役立つことは何かを積極的に確認させる授業が、培った能力を応用して柔軟に使いこなせる能力を育む。

継続性 問いは解いたら終わりということではない。教師も生徒も共に考えていけるような継続性のある問いを、生徒に問い続けさせることは、良い市民の育成へとつながる。

連繋性 生徒が自己と他者、自己と社会とのつながりを意識させる授業は欠かせない。内面に思っていることを言語化し、相手や集団と対話することで知を生み出す。

多義性 多様な答えを多視点からも多角的にも追求するような問いを提示することは、生徒が自己の認識にバリエーションを持たせ、豊かに表現する力となる。

意外性 常識的な見方・考え方を揺さぶる問いを提示することで、生徒が自己の常識を覆し、概念の再構築が図れる。

各教科における「自ら問い続ける生徒」「実践知」のとらえ

	各教科における「自ら問い続ける生徒」	各教科における「実践知」
国 語	言語活動を通じた課題解決に向け、これまで培ってきた言語力を活用し、言語運用していける生徒	実践を考えた学習の場を経て身につけていく、豊かな言語力
社 会	社会的事象について課題を見つけ、問い続けていくことのできる生徒	段階的な思考を経て深められた社会認識や、深めていく過程そのもの
数 学	問題解決において数学的に考えること、その考えによって疑問に思うこと、解決方法が見当たらない等、を発想し続ける生徒	・知恵を使いこなすこと ・日々の授業で数学的な発想をすること
理 科	探究するために必要な科学的なスキルや技術を身につけ、解決の手順を主体的に導けるような、実践的な課題解決力をもつ生徒	日常生活場面を足場にして、自らの方法を工夫して課題を解決するなどの知的創造性の高い資質・能力を身につけることを通して培うもの
美 術	制作をとおして、「なぜこのテーマにしたのか」「なぜこの素材を選んだのか」「なぜこの表現方法が良かったのか」「なぜ」という視点を取り入れ、自ら選んだことの理由から自分をよく見つけ、理解する姿勢を重んじる生徒	・造形表現の創意工夫や鑑賞での相互理解をとおして主体的に生徒が自分を取り巻く環境や社会と関わっていかうとする姿勢 ・生涯にわたり、自分らしい表現を追求する態度
保健体育	運動に興味・関心を持ち、運動技能の習得にたどり着くまでに様々な「問い」を見出せる生徒	思考力・判断力を軸とした実践力を多様に使い、課題を解決していく中で身につけていくもの
技 術	様々な技術的な課題を既習事項を用いて解決し、新たな課題を見いだすことができ、実社会の場で最適解を求めることができる生徒	技術的な課題を見出し、適切な解決策を考え解決するための思考力や判断力
家 庭	他者と比較し今の自分に自ら問い続けながら、自立し社会とのつながりを見つけ、生活を創造していく生徒	学びの中で自分が試して得たことを「知」として蓄積しながら、「現実に使える知」に近づけ、新しい時代を生き抜くための生活を創造する力
英 語	学習した語彙・文法・スキルを活用しながら、英語でよりよいコミュニケーションを行うためにはどうしたらよいかを考え続ける生徒	実社会・実生活において、よりよいコミュニケーションを行うために、英語の語彙・文法・スキルを活用する思考力・判断力
学校保健	受け身の対応ではなく、多様で「自立」した個人が「協働」することにより、新しい価値や社会の変化自体を「創造」することができる生徒	健康課題を発見し、解決する実践の場で、科学的に思考し、適切な行動選択・判断ができるプロセス

(2) 視察校における授業の実践

① 1 学年 保健体育科 器械運動「マット運動」

通常、単元末に行う技能診断を、本単元では3回(初期・中間・終末)に分けて行っている。それにより、自らの課題となる技についてより明確に把握することができ、適切な課題設定に繋がっている。実際に課題を解決するための方法として、ICT機器、資料の活用、仲間との関わりを促すなど、学習方法の基盤となる活動を重視している。自己の課題を把握し、なぜできてなぜできないかを振り返り、自らを問い続けることが運動技能を習得するのに必要な実践力の育成に繋がっている。

② 3 学年 保健体育科 陸上運動「ハードル走」

ハードル走は、短距離走の中にハードルという障害物が設置され、それをいかに速く走り越えるかが記録更新のポイントの1つである。本単元では、ハードリングに着目して、踏み切り、振り上げ足、抜き足、着地の一連の動作を理想に近づけるために必要なことは何かを思考し、実践できることをねらいとしている。また、2・3時間目で仮説を設定し、検証していくことで課題を自分事として捉えさせ、より深い思考や筋道を立てて理想のハードリングに近づけるようにしている。

(3) 分科会

① 質疑・応答で出された内容の抜粋

○倒立の指導は各学校で苦労していると思うが、千葉大付属中ではどのように指導しているか。→ 「技のつながり一覧表」を活用し、補助倒立が習得できてから倒立の練習に入るように学習順を守らせている。生徒相互に補助し合い、高め合えるように、仲間との関わりも繰り返し促している。

○どの授業でもグルーピングがされていたが、どのような視点で生徒を分けたのか。→ 1年生の授業は、入学後間もないので学級の生活班を活用して体育の授業を行っている。3年生の授業は選択で行っているため、どのグループにも2クラスの生徒が入り、他者とのつながりを深められるようにしている。

② 講師の指導

○活動中の生徒全員を止めて、教師が発問をする場面が数回あったが、気づきを促したり運動量を確保する視点からすると適切であったのか考える必要がある。タイミングに応じてグループごとに発問するという方法もある。

○生徒同士で課題解決できる力を育てているが、つまずきのある生徒にとっては解決が難しい場面もある。教師が授業の中で一人一人とどう関わるかも課題である。

○反省・振り返りの場面で、個人の振り返りは行われていたが、全体で共有することは行われていなかった。個人の反省だけだと深まりが半減してしまい、今回の研究テーマにある実践力の深まりにも大きく影響してくる。ぜひ、全体で共有する時間も確保したい。

4 感想

○細やかな指導計画と、生徒が学び続けられる学習カードの工夫がされていた。教師の綿密な準備で授業の質が上がり、生徒の学びが深まることを改めて学んだ。

○生徒相互が積極的に声をかけ、アドバイスし合う姿がたくさん見られた。見学者が数名いたが、先生役として授業にしっかりと参加していた。オリエンテーションでの指導が生きていたと同時に、その重要性を改めて感じた。

○電子黒板やタブレットなど、ICT機器を多数活用して授業を展開していた。生徒は自分の動きを確認し、課題を見つけ、すぐに運動に取り組むことができていた。保健体育科においてもICT機器の有効性を理解し活用しているが、今後も積極的に活用していきたい。

○今回参観した授業では、男女別のグループ編成を行っていたが、他の授業研究会などでは男女混合のグループ編成がより適切ではないかという話を聞く。単元に応じて、男女の分け隔てなく個人の課題に応じて適切なグループ編成ができるよう、さらなる研修を積んでいきたい。